## 1-3 環境情報論──氣は“情報”である

風水における「氣」とは、単なるエネルギーや物理的な力ではなく、存在そのものの情報体として捉えられます。

それは、太極から陰陽、陰陽から五行へと分化し、多様な氣が宇宙に満ちることで、万物が成り立つという根本思想に基づいています。

氣が凝縮して星となり、そこから大地が生まれ、そして山や川などの自然が形成される。

この世界に現れるすべての形や色、音、匂い、流れ、傾きなど──それらはすべて氣の表現であり、氣の情報そのものなのです。

風水は、この氣＝情報を読み取り、再構築するための方法論です。

つまり、風水とは情報空間を設計し直す技術であり、「氣の文法」を扱う術だと言えます。

◉ 情報は“解釈”によって力になる──主観と氣の関係性

氣とは単なる物理的エネルギーではなく、空間に宿る情報ですが、その情報は受け取る側の“解釈”によって意味を持ち、時にその影響力を変えていきます。

たとえば、同じ空間にいても「心地よい」と感じる人と、「何か嫌な感じがする」と感じる人がいます。それは、空間に漂う氣が一様であっても、それを受け取る人間側の心身状態や価値観、経験によって、氣の“意味”が異なるからです。

たとえば、寝室の天井に梁があり、その角がベッドの上に向かって突き出していたとしましょう。この直線的な氣は、人に対して「殺氣」として働くことがあります。しかし、ベッドの位置を少しずらして、その影響範囲から外れるだけで、その梁はまったく問題のない存在に変わります。

この現象は、氣が単に“存在”しているのではなく、“どのように受け取られるか”によってその作用が変化することを示しています。

このような心理的反応には、生理的・神経学的な根拠も存在します。鋭利な形状や直線が不快感や緊張を誘発するのは、脳の扁桃体がそれらを脅威と認識する“脅威検出メカニズム”として知られています。

一方で、丸みを帯びた形状は副交感神経を優位にし、安心感や落ち着きを促すことが心理学実験でも繰り返し確認されています。また、睡眠環境における空間圧迫や尖った要素の存在は、睡眠の質に影響を与え、不眠や自律神経の乱れを引き起こすことが医学的にも指摘されています。

別の例を挙げると、円錐形のオブジェを考えてみてください。

それを上から見れば鋭い先端が向かってきて、無意識に緊張や警戒を感じます。

一方で、下から見上げればその底面は丸く、心理的には安心感を覚えます。

これは、物理的には同じ形状であっても、「氣の受け取り方」は視点と認識によってまったく変わることを意味していることになります。

このような心理的反応には、明確な生理的・神経学的根拠が存在し、鋭利な形状や直線が「不快」や「緊張」を誘発するのは、脳の扁桃体が危険信号として処理するためであり、これは“脅威検出メカニズム”と呼ばれています。

逆に、丸みを帯びた形状は副交感神経を優位にし、安心感や落ち着きを促すことが心理学実験でも繰り返し確認されています。

風水の立場から見ると、この形状の違いは氣の五行的属性とも深く関係しているとして、梁の角のように尖った形状は「火」に属し、鋭く上昇し、刺激と情熱をもたらし、一方、円形の形状は「金」に属し、氣を収束させ、冷静さや整理、安心感をもたらすと考えるのです。

このように、物理的には同じ構造物であっても、そこから発せられる氣の意味は五行における性質と合致し、それが人間の感覚と結びついて、実際の“感じ方”に影響するのです。

ここで大切なのは、火の氣も金の氣も、それ自体に“善”や“悪”があるわけではないということで、陰陽と同じく、五行の氣もまた、そのバランスと使い方によって作用が変わるということなのです。

火は、過剰になれば神経を高ぶらせ、人を苛立たせる「殺氣」にもなりますが、適切に用いれば光と熱を与え、生命を温め、心を奮い立たせる氣でもあるわけです。

金も同様で、鋭く冷たい印象を持ちますが、金属としての硬さと正確さは、手術のメスのように人命を救う働きを持ちます。逆に、ナイフのように使えば人を傷つける凶器にもなるわけです。

しかし、火も金も本来は“氣の性質”であり、そこに道徳的な善悪は含まれていません。

つまり、空間に満ちる氣は、それ自体が情報であり、その情報がどのように解釈され、どのように使われるかによって、初めて「意味」を持つことになります。

環境と意識のあいだにあるこの情報の翻訳こそが風水の核心であり、風水師とは、氣の文法を読み解き、秩序を設計する“翻訳者”なのです。